セッションE「社会思想におけるリプロダクション：スミスとケインズにおけるリプロダクションの問題」

10月24日（土）12時30分～14時30分

　第一報告　野原慎司（東京大学）　第二報告　小平武史（東京大学大学院）

　コメント　安藤裕介（立教大学）

　世話人　　後藤浩子（法政大学）

　（１）セッション主旨

Ａ．スミスは『国富論』第一編第八章で賃金動向と人口動態を関連付けている。これは、家庭内での合理的経済人（ホモ・エコノミクス）の存在を仮定する端緒となる議論であり、それまでのカンティロンやフィジオクラットに見られる土地をベースにした人口論の流れとは大きく異なる。しかし、スミスのこの議論がＧ．ベッカーの「家族の経済学」に直結するわけではなく、人間を合理的経済人と見なして人口論を語ることを批判した経済学者がいた。ケインズである。スミスとケインズの間には一世紀半ほどの開きとマルサスの存在があるが、今回は合理的経済人導入の端緒とその批判という観点から二人の思想家の人口論を分析した。

　以下では報告ごとにオンライン・セッションとメールでの質疑応答の流れを再編集して記録した。報告内容については、すでに大会パンフレットにも概要が掲載されているので、論点のみを簡潔に示すに留めた。

（２）第一報告：野原慎司「アダム・スミスにおける人口とリプロダクション」

《要旨》

『国富論』第一、二編でのスミスは、たんに労働力市場と人口動態という経済理論上の問題だけではなく、それ以前の人口論争における制度の問題をも引き受けていると解釈できる。モンテスキューに始まる人口論は、スコットランドにおいてヒューム・ウォーレス論争に引き継がれ、さらにサー・ジェイムズ・ステュアート『経済の原理』によって議論の枠組みが転換された。ステュアートの人口論は、人口成長の制度的基礎に関心を持つ点において、それ以前との継続性があるが、古代と近代の人口と制度を比較するのではなく、むしろ増殖の自然的で合理的な原因、人口の増加のメカニズムそのものを解明しようとした点で、人口論を転換したと言える。また、ケイムズ卿『人類史素描』も、社会の発展が人口動態に与える影響、特に奢侈の人口増加への悪影響を主張した点で、スミスの人口論の引き金になっている。これらの議論を受け、スミスは、政治体制、土地制度、そして奢侈をも含んだ観点から人口動態を分析したのである。

　《質疑応答》

コメンテーターの安藤会員より、①古代のプラトン『国家』からすでに出産統制と人口政策への言及があるように、国家論においてリプロダクション、とくに人口論は重要な要素であったこと、②後代から見ると誤認であった18世紀の人口減少論と、19世紀の人口過剰論を経て再登場した20世紀の人口減少論という、スミスとケインズが置かれた人口論の文脈について補足説明があった。そして、野原報告に対して、まずフィジオクラットとの関係から、2点質問がなされた。第一に、スミスの人口論が経済成長との関連だけでなく同時に制度論的前提を踏まえていることが報告では指摘されているが、そこに習俗の問題（農業の尊重、奢侈批判、社会秩序）と人口問題を結びつけたミラボー『人間の友あるいは人口論』（1756年）の影響を見ることができるか、ということと、第二にスミスにおいても穀物は他の財とは異なり人間の労働力を再生産する重要な財（食糧）としては特別な地位をもっていたのか、という点である。これに対して、野原会員から、この点では確かにフィジオクラットの思想を受け継いでいるというリプライがあった。また、人口動態を正面から扱った「政治算術」に対して、「信用しない」とスミスは低い評価を与えているが、彼の人口論が単なる「自由放任」ではなく制度を前提したものであったとすると、為政者はどうやって人口に関わる政策を実施すると想定されていたのか、という安藤会員からの質問に対しては、スミスは政治算術すべてを否定したのではなく、ペティのデータの扱いを批判したのだというリプライがなされた。

　また、鳴子会員からは、ルソーが『エミール』で強調した教育の重要性について、スミスに影響したのか質問があった。これに対しては、スミスに『エミール』の影響がどの程度あったかは定かではないが、少なくともスミスは教育の重要性を強調しているという回答がなされた。

　重田会員からは、報告では人口についての古代近代論争を最初に論じたのはモンテスキューであるとされているが、人口論争は国家理性論から来ていて、例えばボテロやボダンにも国力との関係で人口の意識があったと思われる、16・17世紀の議論がどのようにモンテスキューに繋がっているのか、という質問が出された。これに対しては、重商主義や国家理性学説の人口論についてはまだ研究の途上だが、モンテスキューについて言えば、国家理性に従属する形で人口問題を位置付けてはおらず、むしろ習俗・制度に関連づけている点に特徴がある、というリプライがなされた。

（３）第二報告：小平武史「ケインズとリプロダクション：優生学や産児制限への態度からケインズの人間観を探る」

《要旨》

　経済学者としてのケインズの理論の主要な特色として、第一に、期待の不確実性の強調があり、このため、人間に合理的期待形成はできないと考えている点、第二に、（少なくとも短期的には）需給の価格弾力性が低いことを想定している点が挙げられる。これらのケインズの経済理論の背後に共通して存在するのは、人間は経済的合理性だけでは行動せず、ホモ・エコノミクスなどまったく非現実的な仮定でしかないという人間観である。この人間観は彼の功利主義批判、数多くのフロイトへの言及、経済学者の放漫さへの批判に見て取れる。1910年代（「人口論」講義）、20年代（産児制限による人口抑制提言）、30年代（人口減少と失業増加）のケインズのテクストの中でのリプロダクションについての言及から、（１）先行諸研究ではケインズが優生学を支持していたとされているが、積極的/消極的優生学に対してケインズは距離を置いていたこと（cf.ピグーの優生学支持）、（２）経済学者の傲慢をいさめるケインズの人間観からの自然な流れとして、社会全体の経済問題を解決するという目的だけのためにリプロダクションをコントロールすることについてケインズは否定的であり、人間にとってのリプロダクションの選択は、それぞれの人間の生き方の問題として経済問題から離れて自由に選択されるべきものと彼は考え、この延長上に彼の産児制限運動への生涯に渡るコミットもあったこと、（３）ホモ・エコノミクスを非現実的と退け、人間の行動は価格非弾力的であるとするケインズの人間観からすれば、リプロダクションのような人の生きざまの根本に関する意思決定について、経済的インセンティブが果たすことができる役割は小さいゆえに、人口コントロールの手段としての経済的インセンティブ政策を否定したこと（cf.ミュルダールによる経済的インセンティブ付与の提案）、という三点の特徴を挙げることができる。

《質疑応答》

　安藤会員、山尾会員から、産児制限に対するケインズのスタンスについて質問が出された。ケインズは1920年代の著作や講演で産児制限による人口政策の提言を行い、人口を国家の政策の対象とすべきと述べている一方で、産児制限は女性解放にも関わっていると見なしているが、ケインズの中で国家と個人の選択の自由とはどのような関係にあるのか。これに対して、小平会員から、ケインズの「ニュー・リベラリズム」は自由放任主義の19世紀のリベラリズムに公正という観点から修正を加えているだけで、そこからソビエト型計画経済支持に一足飛びに飛躍してしまうようなものではないこと、ケインズが念頭に置いている政策とは「一人っ子政策」のような積極的なものではなく、当時産児制限を妨げていた法制度上や慣行上の制限を国家が解除するというものなので、国家政策と個人の選択の自由とは二律背反と考えるべきではない、というリプライがあった。

　また、ケインズの人間観について、フロイトの影響を受けた、不合理でリビドーに振り回される人間像と、合理的制御を行いうる人間像という二つの要素をどう解釈するか、また、彼の優生学に対する距離の置き方をどう評価するかについて、「バランス感覚というよりむしろ知性主義」（玉井会員）という意見がだされた。これに対し小平会員から、ケインズは青年期の自身の合理主義偏重を後年自己批判していることから考えてケインズが知性主義一辺倒だったという見解には同意できない、というリプライがあった。また、「優生学への積極的批判はなされていない」（山尾会員）という意見がだされた。

　重田会員からは、これまでにミクロ経済学が前提する合理的経済人への批判はあった（行動経済学やアマルティア・センなど）が、マクロ経済学では前提とされる人間像があまりクローズアップされず、依然として合理的経済人が前提されているように思われる（マクロな国際経済秩序におけるワシントンコンセンサスなど）、ケインズによる合理的経済人批判はなぜ影響を及ぼさなかったのか、また、ケインズの合理的経済人批判などは全く無視して、ベッカーのような議論が平気でなされるのはなぜか、という質問が出された。

これに対して、小平会員から以下のようなリプライがあった。少なくとも「マクロ経済学」という言葉をサミュエルソンがIS/LMモデルを前提にして使った当初は、ヒックス流にデフォルメされ、その過程の中で予想の不確実性の要素が多少そぎ落とされてしまったものの依然としてそれはケインジアンの経済学そのものだった。しかし、やがてマクロのミクロ的基礎というようなことが言われるようになり、合理的個人という想定が少しずつ入り込んできたのだと思われる。つまり、もともとの「マクロ経済学」の中にはケインズ的な非合理な経済主体の行動がそれなりに織り込まれていたのだが、次第に排除されていった。また、ケインズの合理的経済人批判が看過された原因については、いろいろな切り口での答え方があると思われる。まずは、恐慌がしばらく（先進国で）起きなかったので人間の非合理性について（先進国の）経済学者は忘れていられた、また、いわゆるアメリカンケインジアンはケインズのホモ・エコノミクス否定論をあまり引き継いでおらず、一方イギリスでケインズのホモ・エコノミクス否定論を引き継いだジョーン・ロビンソンは共産党賛美など極端に走ってしまった、さらには、非合理な個人を前提としたモデルは複雑になってしまい構築が難しかった、などが挙げられるが、ともあれ、一つの要因に帰するには大きすぎる問題のように思われる。

参加者：29名